

---

# ひぐらしのなく頃に白 人隠し編

kai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に白 人隠し編

### 【Nコード】

N3833Z

### 【作者名】

k a i

### 【あらすじ】

ある日、この雑見沢に2人の転校生が引っ越して来た。1人は明るく1人は暗い対称的な2人だった。しかし、ちょうどその頃、雑見沢に大きな出来事が・・・

## 新たな（前書き）

みなさん、おはようございます。こんにちは。こんばんは。どうも  
k a i です。新しい物語を作ってみました。暖かい目で見てやって  
ください。

## 新たな

主人公

神寺白 かみじはく

転校生の1人、明るい性格で辛い物が大好きな女の子。ちなみに彼女は、中学3年生。

鬼神黒 きじんくろ

転校生の1人、暗い性格で苦いものが大好きな男の子。彼も中学3年生だ。

光があれば闇がある・・・陰があれば陽もある・・・人間も同じ・・・  
・幸せになる者もいれば不幸になる者もいる・・・それが全ての法則。

## 白side

私は、神寺白 かみじはく。千葉県からやって来た。両親は私が幼い時に交通事故で他界した。私は、おじいちゃんとおばあちゃんが雛見沢に住んでいるのでそこで引き取ってもらうことになった。そして今、着いたところだった。雛見沢に来て最初に言った言葉は、

「雛見沢は、空気がおいしいな」

私は、そう言っておばあちゃんとおじいちゃんの家に向かった。行くまでにかなりの時間がかかった。

そして……ようやく……着いた。長かった！！実に長かった！  
！もう……動けない……その時、おばあちゃんが出てきた。

「あら～白ちゃんいらっしやい。疲れたでしょ？お風呂沸かしてあるから入ってきなさい」

「ありがとう、おばあちゃん」

私はお風呂場に行き汗でベトベトな服を脱ぎシャワーを浴びた。そして、パジャマに着替え居間に行った。そこには、おじいちゃんがいた。

「おじいちゃん」

「おお、白か！！」

おじいちゃんは、驚いたように言った

「久しぶりだね」

「そうだな～」

それから、色々と話が弾んだ。千葉のことや友達のことなど。そして、思い出した。確かここ最近私の友達がここに引っ越したと聞いた。

名前は……えーと。あつそうだ！！確か本性クロト（ほんしょうくろと）君が来てたんだ！！

本性クロト（ほんしょうくろと）君とは、昔、私が東京にいた頃、

「ご近所にいた内気な男の子だった。よく遊んだっけ……元気にしてるかな」その時、おばあちゃんがやって来た。

「夕飯ができましたよ」

「やったーお腹空いてたんだー!」

「おお、飯か」

夕飯を食べた後、私は明日の学校の準備をした。そして、すぐに寝た。朝はさわやかに起きた。そこにおばあちゃんが現れてこう言った。

「白ちゃんおはよー朝ごはん準備してあるからね」

「うん、ありがとう」

私は、朝ご飯を食べ終え顔を洗い歯磨きをして制服に着替えおばあちゃんにこう言った。

「行ってきまーす!」

## 新たな（後書き）

ちなみにこの物語は、「ひぐらしのなく頃に生」と「ひぐらしのなく頃に死」の続編です。

初めまして

私は今、学校の中の職員室前にいる。とても緊張していた。しかし、深呼吸をして心を落ち着けて職員室のドアを開けて私はこう言った

「失礼します」

そしたら、女の先生らしき人が現れてこう言った

「初めまして、担任の知恵です」

「初めまして」

とても優しいそうな先生だなーと思った。そして、知恵先生が言った

「神寺さんはそのイスで待っててください。まだ、あなたの他にも転校生が来るんです」

初耳だった。私の他にも転校生が来るなんて。しばらく待つと、ガラガラとドアを開ける音が聞こえた。振り向いて見ると、そこには男子が立っていた。さしずめこの子が転校生だと分かった。すると、知恵先生が

「では、教室に行きましょう。神寺さんと鬼神くん付いて来てください」

私は、「はい」と言ったが、鬼神君は何も返事がなかった



教室の前に立つて、また緊張感に襲われた。だけど、鬼神君は大丈夫そうに見えた

そして、先生が教室に入った瞬間、先生の顔に雑巾が投げつけられた。パアアンものすごくいい音が鳴った。先生の前には、私と同じ年くらいの男子がいた。その男子は、苦笑いしながら先生を見てた。

「前原君・・・これは一体どういうことですか？」

先生は、体を震わせて言った

「前原君！！後で職員室に来てください！！」

大丈夫なのかな？このクラス・・・私は、心配になった。先生は、若干怒りながらもこう言った。

「今日は、2人転校生が来ています。では、神寺さんと鬼神君入ってきてください」

教室の中に入ったら、みんな学年がばらばらで驚いた。そんなことを思ってる時に、知恵先生が言った。

「では神寺さん自己紹介してください」

「はい！！私の名前は神寺白です。好きな物は辛いものです。みんなよろしくね！！」

その瞬間、大きな拍手が出てきた。

「次は、鬼神君お願いします」

「・・・鬼神黒・・・よろしく」

クラスがざわざわしだした

「はい、静かに！！では、神寺さんと鬼神君はそこに座ってください」

「はい」

「では授業の方を始めたいと思います」

## 遊び

授業が終わって教材を片付けていた所、緑色の髪をした人が私に話かけてきた。

「ねえ、おじさん達のゲーム部に入らない？」

ナンパするような言い方だった。しかも、自分のことをおじさんて

「ゲーム部？」

「ただゲームをするだけの部」

なぜ女なのにおじさんていうの？そう思いながらも私は、

「うん、入る！！」

そしたら、緑色の髪をした子は

「よっしゃー部員GET！！あっそうだ、名前言い忘れてたおじさんそのおじさんの名前は園崎魅音そのおじさんて言うの。よろしくね」

と言った。私も、よろしく！！と言った。

「じゃあ、ここで待っていて。」

魅音ちゃんは、そう言つと今度は鬼神君の所に行き部活の勧誘をしていた。とても喜んでた。と言う事は鬼神君は部に入ったみたい。

魅音ちゃんが

「全員集合!!」

て言ったので私は魅音ちゃんに呼ばれて行った。そして、魅音ちゃん  
は部活メンバーらしき人達に

「我が部に新メンバーが加わった!! 神寺白ちゃんと鬼神黒君だ!  
」

みんなは、拍手して私達を歓迎した

「ではみんな各自自己紹介して」

「じゃあ、俺から・・・俺の名前は前原<sup>まえはら</sup>圭一<sup>けいいち</sup>よろしくな

「うん、よろしく!!」

「次は、レナの番だね・・・竜宮レナ(りゅうぐう)だねだよ。よ  
ろしくね」

「うん、よろしく」

「次は、ぼくの番です・・・ぼくの名前は、古手<sup>ふるで</sup>梨華<sup>りか</sup>なのです  
よろしくなです」

「に・・・にぱあ」

「次は、わたくしですわね。わたくしの名前は北条<sup>ほつじょう</sup>沙都子<sup>さつこ</sup>ですわ。

以後お見知りおきを」

「よろしくね!」

「では部活恒例のあれをやりますか」

「え、あれって何?」

私は聞いた。そしたら、圭一君が説明した

「あれっと言うのはいわゆるジジ抜きだ。俺が入った時もやったぞ!ちなみに負けたらひどいめにあうから覚悟しといた方がいいぞ」

「ひどいめってどう言うこと?」

「つまり、1位になった人はビリになんでも命令できるんだ」

「ちなみに……俺は……連続で最下位だからいつも……耐え難い屈辱を……受けている」

圭一君は、泣きながら言った。

「そうですか……」

そして、ジジ抜きが始まった結果、勝者は魅音ちゃん敗者は圭一君だった。魅音ちゃんは、圭一君に女子のスクール水着を着て帰れと言ふ命令だった。私は、ようやくこのゲームの恐ろしさを知った。そういえば、聞くことがあった。それは……本性クロト君のことだった。思い切って聞いてみた

「ねえ、本性クロト君確かここに引越したらいいんだけど今日、休み？」

みんなはびっくりしたような顔だった。

「白ちゃんは、クロちゃんの知り合いなの!？」

「う・・・うん」

## 罪悪感

みんなは驚いた顔をしたと思ったら次は暗い顔になった。その表情は、私を不安へと変えた。何でみんな黙ってるの？そう思った。そうすると魅音ちゃんがなぜか泣きながら言った。

「死んだんだよ・・・私のせいで」

「え・・・どういふこと？」

「私がちゃんと周りを見ていなかったから・・・クロちゃんが・・・クロちゃんが!!」

魅音ちゃんは取り乱していた。

「魅音落ち着け!!」

圭一君がそう言って魅音ちゃんを落ち着かせていた。

「白、来るのです」

梨花ちゃんが私を呼んだ。訳が分からないまま梨花ちゃんに廊下へと連れて来られた。

「白・・・このことはなるべく魅いの前で言わないで欲しいのです」

「何で？」

「魅いは自分のせいでクロトが死んだと思っています。今も自分のこと責めているはずなのです。だから言わないで欲しいのです」

そ・・・そんな・・・クロト君が死んじゃったなんて・・・私は、涙があふれてきた。しかし、涙は流さなかった。だって私が泣いたら魅音ちゃんもつと自分を責めることになるから私は流さない！そして、冷静になり梨花ちゃんから全てを聞いた。クロト君がここに来て変わったことやクロト君の最後を・・・そして教室に戻った。魅音ちゃんは、ずいぶんと落ち着きを取り戻していた。私は魅音ちゃんの所に行って謝った。

「ごめんね、嫌なこと思い出させちゃって・・・」

「うん、いいよ。こっちもごめんね取り乱しちゃって」

こうして私の一日は終わった。

?side

「はあ～めんどくせえ～やるのはいいけど準備するのがめんどくせえ～ようし!!今日の仕事はこれで終わりだ～明日が楽しみだ!!人が恐怖に引きつる顔を見るのは格別におもしろい・・・そういえ



ばこの土地に神がおったなあ〜神の一人としてあいさつをしなく  
ちな・・・ていうか俺が騒動を起こせば向こうから来てくれるか・  
」

俺はそう言つと暗〜い暗〜い森に入っ て行きましたとき。

## 罪悪感（後書き）

ちよつと文が短いですがご了承ください。

## 記憶

グシャ・・・グシャ・・・何か聞こえる。よく見ると誰かがバットを振り上げて・・・そして、振り下ろす・・・その度に、グシャ・・・グシャ・・・そのくり返し。何をやってるんだろう・・・と思い床を見てみると、変わり果てた姿になった魅音ちゃんとレナちゃんだった。こんなことをするのは誰？私はバットを持った人の顔を見た。そんな・・・そんな・・・圭一君？

「いやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・夢？」

何・・・今の？とても夢とは思えなかったほどリアルだった。そして、私は深呼吸して心を落ち着かせた。そして、時計を見てみると・・・

「やつばー寝過ごしたー！ー！」

私は急いで髪を整えて顔を洗い制服に着替えておばあちゃんが作ってくれたお弁当を持ってそして、食パンをくわえて学校に行った。何とか無事に教室に入った。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・危ない・・・危ない」

「白ちゃんおはよう」

魅音ちゃんが笑顔で言った

「お……おはよう」

「はう、疲れきった白ちゃんかあいよいよお持ち帰りいいい……！」

助けて……息が……できない

「おい、レナ……！白が苦しそうだぞ……！」

「あつごめん白ちゃん……！」

「う……うん」

良かった……昨日と同じだ……しかし、あの夢は本当になんだったのか？

お昼ご飯

私は、みんなとお弁当を食べた。そして、今日の夢をみんなに話した。

「え……！？私とレナが圭ちゃんに殺される……？ちょっとやめ

てよ縁起でもない」

魅音ちゃんが笑いながら言った。みんなも続いて笑った。二人を除いて・・・一人は鬼神君、興味なさそうにお弁当を食べていた。二人目は、梨花ちゃんだった。真剣に私の方を見ていた。そして、食事の後に、梨花ちゃんに呼び出された。

「詳しく教えて欲しいのです。その夢のこと・・・」

「別にいいけど」

私は、細かく説明した・・・

「どうもありがとうございます」

「どういたしまして」

その後、部活動を始めようとしていた時、知恵先生がものすごい勢いでこちらに来てこう言った

「今すぐに部活動を中止にして家に早く帰ってください!!」

「な・・・何ですか?」

魅音ちゃんが聞いた。

「村の人が次々と行方不明になってるんです!!」

## 失踪

私はそれを聞いておじいちゃんやおばあちゃんのことを気になった。

「大丈夫かなおじいちゃんとおばあちゃん・・・」

「大丈夫だよところでどれだけの人が行方不明になっているんですか？」

魅音ちゃんはそう言った

「人数はつきりとは分かりませんが数十人が行方不明になっていると聞いています。気を付けてください」

「はい、分かりました・・・じゃあみんな今日の部活はなしということで!..!」

こうして私達は解散した・・・

梨花 s i d e

今日はおかしなことからばかり。白は別の世界の圭一の結末を夢で見るとして、村人が失踪するし。

「羽入一体何がどうなっているの？」

「あうあうそれはぼくにも分からないのです」

「まったく、神様のくせに何で分からないのよ！」

「はうう申し訳ないのです。でも、ただ1つ言えることは村人が次々と失踪するなんてそう滅多に起きることではないのです」

「ということは誰かが仕組んだのね。でも、それだったら大規模な人数が必要でしょ」

「はい」

「でも、そんなに人数がいたら目立つじゃない」

「はい、そうです。だから犯人は1人でやったのです」

「何言ってるの？ たった1日でこんなにも人がさらえるわけないでしょ」

「それは人だったらの話なのです・・・」



「え……犯人は人ではないってこと？」

「そうです」

「じゃあ犯人は何者？」

「たぶんぼくと同じ力を持った者です」

「それって……まさか!?!」

「はい、神です」

## 失踪（後書き）

今回は、ある人の依頼で羽入を出してみました。

## 正体

白side

カキン・・・キン・・・何この金属音・・・私は、音がする方へ見  
てみると誰かが学校の屋根で戦っている・・・1人は鉈なたを持ち1人  
はバットを持っていた・・・よく見ると圭一君とレナちゃんが戦っ  
ていた・・・なぜか2人は笑っていた・・・

「2人共何やってるの？危ないからやめて!!」

2人は聞こえていないようだった・・・そして2人は動き出して・・・

「はっ、また変な夢・・・一体何なの？」

私はまた眠気がきて寝た

?side

「まだかな～早くしないとさらった村人達の命はないんだけどな～」

「さてと、暇だからもう一度村人をさらいに行くか～」

俺はそう言いつとすう～と消えていきましたとさ。

「ふあゝあ・・・よく寝た。よし、準備するか!」

私はとつと準備をして学校に行った。行く途中、突然頭痛がきた。

「イタツ、頭が・・・」

その時、頭から色々なイメージみたいなものが流れてきた。そして、分かった。私が今まで夢で見たものが何なのか・・・そして、梨花ちゃんが何者かが・・・私は学校に着いて走って教室に行った。

「おゝ白ちゃんおはよう!」

魅音ちゃんはテンションがすごく高かった

「うん、おはよう。梨花ちゃん・・・ちよつといい?」

私は梨花ちゃんを廊下に連れ出した

「み?何なのですか」

「分かつちゃったんだ梨花ちゃんの正体が」

「!？」

「梨花ちゃんは他の世界でも圭一君達に会ってるんだよね」

「何で・・・そんなこと知ってるの？」

急に梨花ちゃんという言葉づかいが変わった

「だって私そこにいたから・・・」

「あなたは何者なの？」

「私は、神の1人」

「ということあなたは人をさらったの？」

「いいえ、それは私じゃない。でも、邪悪な何かを感じる。そうで

しよ、羽入ちゃん」

「え……何でぼくの名前を……」

「私……梨花ちゃんと羽入ちゃんの話聞いてたんだよ」

「はう？そうだったんですか。確かにぼくも、何か嫌なものを感じていました」

「私の予想だけどその邪悪なものは私達の近くにいる」

正体（後書き）

ちょっと短いかもしれませんが、ご了承ください

## 作戦

「私達の中の近くにいるですって!?!」

「うん、そしてそいつはまた事件を起こすと思っの……」

「また!?!どうするつもりなの!?!」

「私に考えがあるの……」

「何?」

「それは犯人が人をさらうまで待つの」

「ただ見てろって言っの!?!」

「梨花、落ち着くのです……」

羽入ちゃんが言った

「私のプランはこう、そいつが村人をさらったその瞬間を狙っ」



「でも、どうやって犯人を探すのですか？」

「そうよ、それが出来なきゃ事件の止めようがないじゃない！」

「それも考えてある、私達神は力を使う時に形跡を残すの、それで探せば分かる」

「じゃあ昨日の事件だったらすぐに分かったんじゃないの？」

「その時、私は記憶が戻ってなかったから分からなかったの」

「なるほどね、でも神である羽入も気づいたんじゃないの」

「そうですね、何でぼくは力の存在に気づかなかったのですか？」

「それは・・・羽入ちゃんはたぶんかなり前に生まれた神様だから力の存在に気づかなかったと思う」

「ふふっ、つまりお年寄りは感覚がにぶいということね」

「あつ・・・あつ〜ひどいですよ梨花あ〜」

「分かったわあなたの言葉を信じる」

「ありがとう・・・じゃあ教室に戻ろっか」

「分かった」

こうして話が終わり教室に戻っていった。

「白ちゃ〜んどうしたの？」

いきなり声をかけてきたのは魅音ちゃんだった

「何でもないよ」

「ぶつ〜んそうなんだ」

いきなり魅音ちゃんの時つきが変わってこう言った

「私達、仲間だから隠し事はしちや、嫌だよ」

うわゝ何度も見るけど怖いなゝ

「大丈夫だって!!」

「そつ、ならいいや」

## ゲーム

私は授業後、早速作戦を実行した。事件が起きるのにそう時間はかからなかった。すぐに力を使ったのが分かった。場所は神社だった。私は、すぐに現場に行った。そこには、梨花ちゃんと・・・鬼神君？鬼神君は見下すようにこちらを振り向いた

「よお、白さん」

「鬼神君・・・何やってたの？」

「何って人を消してたに決まってるじゃん」

「じゃあ・・・あなたが犯人？」

「あっはっはっは！！！！・・・せうかい読者が予想してるように俺が犯人だ！！」

鬼神君は、この世の者とは思えない笑い方をして言った

「全くなぜ最初に気づかないかな？お前ら神様のくせに鈍感だな？」

「うるさいのです！とにかく消した村人を解放するのです！！」

「無理だな・・・だって俺の力を増幅ぞつぷくするための人柱にするから」

「え……?」

「知ってるか? 神の力を上げるには人の肝きもが必要なんだよ。だから返せない」

鬼神君は、ニヤニヤ笑いながら言った。その時、私の後ろから誰かが来た。

「白ちゃんこれは一体どう言う事なの?」

そこには魅音ちゃんとレナちゃんと沙都子ちゃんと圭一君だった

「おゝこれはこれは部活メンバー諸君じゃないか」

「魅音ちゃん何でここに!?!」

「白ちゃんが怪しいからずーとついてきた」

「ははっこれで役者はそろった!!! まっ、本当はそろえるつもりはなかったけど」

「さ〜てとじゃあ折角なんでゲームを始めたいと思います!!--」

「ゲーム？」

「そつだ、ゲーム部だったらやるよね？」

「分かった」

「そつ来ると思ってたよ。じゃあやるのは・・・缶けりで」

「缶けり？」

「そつだ・・・ルールはこつだ。まず俺が逃げるそしてお前らが俺を探す。範囲はこの神社一帯だ」

「それだけ？」

「ああ、ちなみにタイムリミットは1日だ。もし時間内に俺を捕まえないとこの世界は俺の者・・・もし、俺を捕まえたら本性クロトに関する情報をお前らにやる」

「本性君って・・・あれはただ通り魔に襲われただけでしょう？」

「ははっ！、バーカこんな田舎に運悪く通り魔が登場すると思うか」

「もしかして・・・!!！」

「おゝとそれ以上言うなよ、読者にもがんばって推理させてやんなよ。」

「あなたは何者なの？」

魅音ちゃんが言った

「ん？何言ってるんだよ俺は鬼神黒だよ。じゃー！！」

そう言うと鬼神君は走ってどっか行ってしまった。この勝負何としても勝たなきゃ！！

## ゲーム（後書き）

徹夜して考えました・・・たぶん誤字脱字等あるとおもいますがご了承ください



## 事実

私達は、神社の入り口あたりに缶を置きそれぞれ探しに行った。私は、神社の中を探していた

「どこにもいない・・・」

私は、そう呟くと誰かが、いたぞ！！という声が聞こえた。私は急いで缶の所に行った。そこには鬼神君がいた。鬼神君は私に来たのを感じて缶を蹴った。缶けりは鬼が缶を蹴られるとしばらくの間動けなくなる。ちなみに鬼は普通1人だけ今回私達が鬼で鬼神君が逃げる方なのだ。私は缶を元の場所に置いた。しばらくすると、魅音ちゃんが来た。

「黒君は見つけた？」

「うん、見つけたけど缶を蹴って逃げられちゃった」

「そうか」

魅音ちゃんは難しい顔をしながらそう言った

「あつ！だったらレナに良い考えがあるよ！！」

「えっ！？」

「ふう〜暇だな〜あいつら本当に俺を捕まえられるのか？あつちに神2人がいるから大丈夫だと思っただけど・・・期待はづれだな」

俺は、今神社の屋根にいる。あいつらが全く俺を捕まえられなくて俺はしばらく寝ていた。それから、どれくらいの時間がたったんだ？あたりはだいぶ暗くなっていた。俺は、時間を確認した。・・・残り一時間か・・・俺は最後までいい姿を見せてやっても良いか・・・と思ひ。あいつらを探していた、そしたら、圭一を見つけた。

「おい、俺はここだぞ〜」

と言った。そしたら圭一は振り向き・・・

「あつ！〜見つけたぞ！〜」

俺はダッシュで缶の所に行った。その時！〜俺はなぜか知らんが落ちた・・・

「なつ！〜これは一体どういうことだ！〜」

よく見るとこれは落とし穴だった。その時、「黒君みつけた」と誰かが言った

そこには、レナがいた

「おい！〜これはどういことだよ！〜」

「だってルールにはトラップを使っちゃいけないなんて言っただよ。だからトラップの申し子沙都子ちゃんに頼んだんだよ」

「くそ!!」

俺としたことが沙都子のことすっかり忘れていた!!何度も体験してるのになぜ気がつかない!!

「分かった・・・俺の負けだ」

俺は落とし穴から出てこう言った

「クロトのこと話してやるから全員呼べ」

そして、レナはうなづいてみんなを呼びに行った。しばらくしてみんなが来た。

「よし全員そろったな〜じゃあ話すぜクロトのことを!!」

みんなは真剣に俺の方を見ていた

「まず聞くがクロトの犯した罪はお前ら知ってるな」

「それって確か友達と話してる途中に通り魔が出てきて友達を殺して自分が襲われそうになって手元にあったガラスで犯人を刺して事件にならなかったやつでしょ?」

魅音が聞いてきた

「ああ、そつだ」

「それが何？」

「あの話を聞いておかしいと思わなかったか？」

「うん、思った。だって人を殺したら絶対に警察が動くに決まっている」

「何で警察が動かないのか……て言うとなら俺が裏で手を引いていたんだよ!!」

「え？」

「あははははっ!! 全く笑えるよな、全部俺がやっていたんだよ!!」

## 黒幕

「ああ、そうそう。ちなみにクロトを殺したのも……俺だ」

「え！？だってクロちゃんは通り魔に殺されたんじゃない……」

「あつはつはつはつ！！そうだろうな！目の前で死んだもんな！でも違うんだよ。俺は近くにいた村人を操ってクロトを襲わせたんだよ……！」

「よくもクロトを……！」

俺がクロトを殺したことを知って圭一は怒鳴った

「どうしてクロトを殺したの？」

梨花ちゃんが言った

「はあ？決まってるじゃんあいつ友達はもう作らないと決めておきながら友達を作ってそして最終的には自分は幸せになるってそんな漫画みたいな展開にしようとしやがって……ふざけんなよ！！」

俺は認めね〜だから殺してやった」

「そんなくだらねえ〜このためにクロトを・・・」

圭一はそう言う俺に殴りかかってきた。まあ〜簡単によけてやったがな

白side

全部鬼神君がやったこ

となの・・・!?

「全く笑っちゃうよ

な〜自分のせいで友達が死んだとか人を殺してしまったとか、全部俺が仕掛けたことなのにな〜」

「笑うな!!」

魅音ちゃんが今まで見たことのないくらいすごい剣幕けんまくで言った

「何でだよ普通ここは笑うところだろ」

「クロちゃんはずーと苦しんでいたんだ！自分のせいで友達が死んじゃってそして、犯罪者とはいえ人を殺して・・・そうやって真剣に悩んで苦しんでいたクロちゃんを笑うな！！」

「くだらね・・・じゃあ、俺は帰るから」

その時、魅音ちゃんが

「近いうちに必ずお前を殺してやる！！」

魅音ちゃんはすごい目つきで言った

「ああ、やってみろ」

そして、鬼神君はどこかへ消えていった





## 黒幕（後書き）

待たせてしまいまして申し訳ありません。時間の都合でかけなかつたんです。次の投稿は、23日とさせていただきます

## 兄貴

鬼神 side

俺は今、森の中にある小屋の屋根で月を見てる。

俺は色々な事を考えながらその月を見てた。

俺のやってきた事は本当にこれで良かったのか・・・

「当たり前だろ」

「誰だ！」

「ぼくだよ」

「お・・・お前は・・・誰だっけ？」

「おいー！！ぼくは、お前の兄貴だよ、ていうか兄貴に向かってお前はないだろ！！」

「冗談だつて・・・それよりも人の心を読むの止めてくれよ！」

「あはっ！！悪いね〜つい癖だね」

このいかにもバカそうな奴は 鬼神きしんあく悪認めたくないが俺の兄貴だ。

「おい黒！兄貴に向かってバカはないだろしかも、読者の前で何勝手にぼくの紹介してるんだよ！！」

とまあ人の心を読むのが兄貴の能力だ。ちなみに俺は人を操る能力がある。

「ところで兄貴何しに来たの？」

「黒何度言ったら分かる？兄貴じゃなくてお兄ちゃんだ！！」

くそめんどくせえー兄貴だな

「おい黒！！」

「はいはいお兄ちゃんところで何しに来たの」

「暇だから遊びに来たよ」

おいおい！嫌がらせか！？こっちは忙しいのに・・・

「嫌がらせじゃないよ〜大丈夫、お前の仕事は邪魔するつもりないから」

大丈夫じゃねえよ、兄貴が大丈夫って言ってるくんな事ねえよ

「おい黒わざと言ってるだろ」

わざとだよ

「くそ〜まあいいやところで黒」

「何だよ……」

「計画は順調か？」

「ああ、何とかな」

「そうか……お前さえ良かったら手伝ってもいいんだぜ」

「いや、これは俺の仕事だ」

「はいはい、そのかわりお前の身に何かあったらぼくも加わるから」

「分かったよ」

ちっ！！めんどくせえ！奴が来たな！

「おい黒お……！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3833z/>

---

ひぐらしのなく頃に白 人隠し編

2011年12月23日23時48分発行